

東成区の昭和 やぶにらみ日記

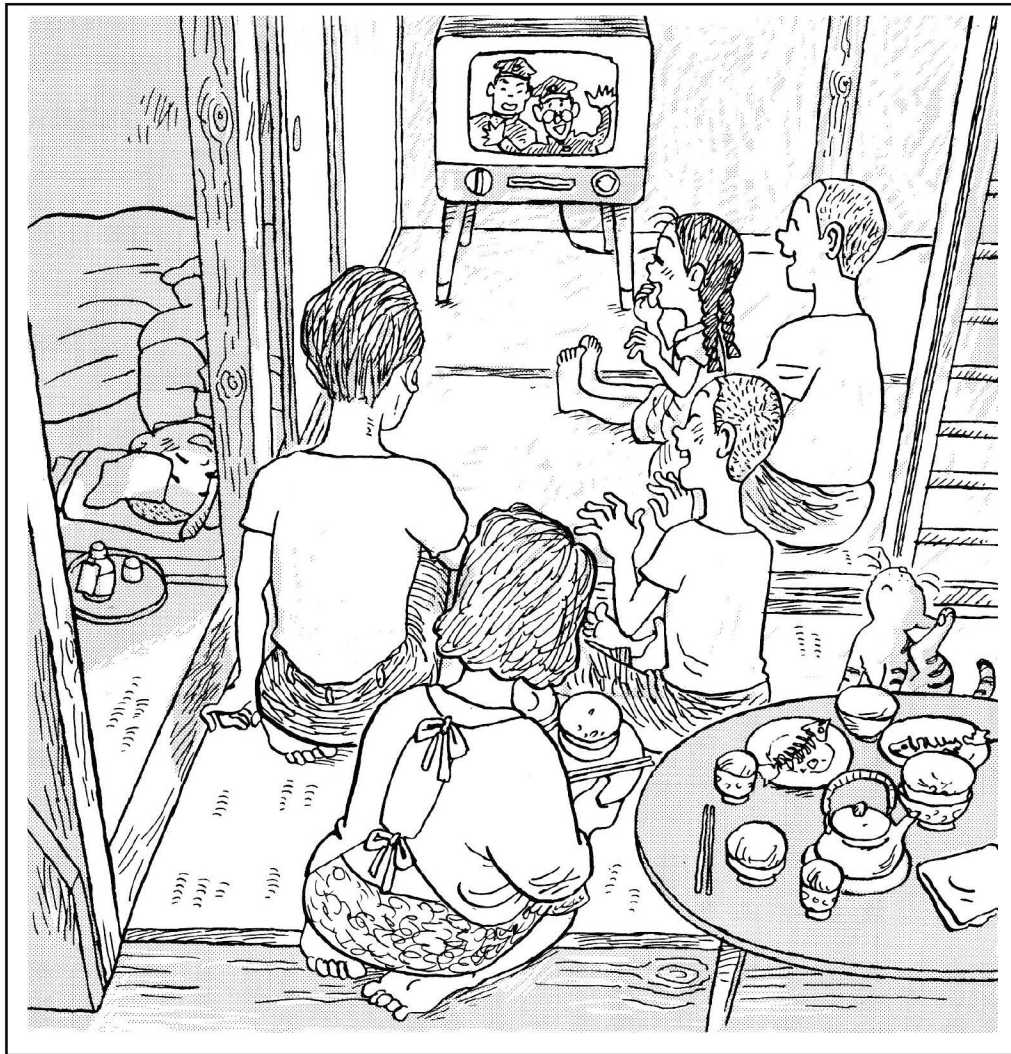
絵と文・柳たかを

復帰の試練

昭和30年頃、戦後焼跡から立ちあがろうともがいていた日本、その日の食べ物を手に入れることに精一杯で、父親のような日本画家に画商から注文などあるはずもない飢えた時代でした。

戦後生まれのベビーブーム世代の子供達が使う学用品にワンポイントのカットイラストを大量に絵付けする内職仕事。

おかげで日々の飢えから解放されたものの「自分の進むべき道はこんな道ではない」という葛藤・あせりは抱えたまま。



肺炎の高熱で起きることもできないなか、テレビのお笑い番組の声だけ聞いて笑っている僕

とそんな頃、父が戦前所属していた青龍社[代表・川端竜子]が活動を再開したとのニュースを仲間の先生から聞かされる。

日本画家として活動していくためには、青龍社に応募出品者として受け入れられ、且つ同展覧会に作品応募して入選しなければならない。

作品製作途中には事前審査で電子代表に何度か下絵を提出して製作のアドバイスをいただかねばならない。OKの許可をもらって描き進めた渾身の完成作品(完成画は300号サイズ)が残念にも落選することもありえる、厳しい戦いだ。

父はこの復帰チャンスにしがみついて賭けた。するとその製作時に僕が肺炎にかかって死線をさまよってしまった。

しかし日本の木造家屋には襖絵や床の間の掛け軸、玄関に置かれる衝立など、表具師の手で家具と一体化された日本画は調度品として使われたので異常な時代でないかぎり、日本人の生活には欠かせない生活芸術でした。

そんな日本画家に憧れて田舎から大阪に出て来て修行した父が戦争で約10年間筆を折り、家族を食べさせる為のアルバイト&職人仕事に汗を流し続けた。

超えるべき(試練)があったとすれば、まさに父にとってこの数ヶ月間がそうだった。

やぶにらみ日記 (501)
東成区の昭利



(43) 写生



やぶにらみ日記 (502)
東成区の昭利



(44) 写生



やぶにらみ日記 (503)
東成区の昭和



(45) 写生



やぶにらみ日記 (504)
東成区の昭和



(46) 写生



やぶにらみ日記 (505)
東成区の昭和



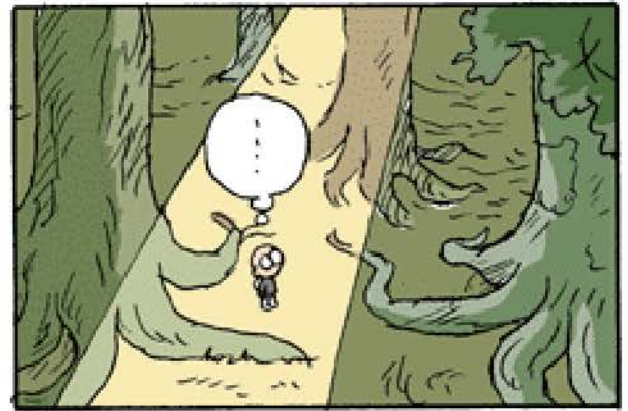
(47) 写生



やぶにらみ日記 (506)
東成区の昭和



(48) 写生



やぶにらみ日記 (507)
東成区の沼和



(49) 写生



やぶにらみ日記 (508)
東成区の沼和



(50) 写生



やぶにらみ日記 (509)
東成区の沼和



(51) 写生



やぶにらみ日記 (510)
東成区の沼和



(52) 写生



やぶにらみ日記 (511)
東成区の沼和



(53) 写生



やぶにらみ日記 (512)
東成区の沼和



(54) 写生



やぶにらみ日記 (513)

東成区の沼和



(55) 写生



やぶにらみ日記 (514)

東成区の沼和



(56) 写生

